



自ら糸を紡ぎ、染め、美しい紋様を織りなす。

秩父太織職人

ふとり

南 麻耶 氏



Maya Minami

1988年神奈川県生まれ。美術短大を経て、専門学校で染色と織物の技術を学ぶ。その後スウェーデンに留学して北欧織の技術を学び、帰国後に秩父太織の工房「Magnetic Pole」を共同設立。

秩父太織(ちちぶふとり)

江戸時代に生まれた絹織物。養蚕農家が規格外の繭で糸をつくり、作業着用に仕立てたのが始まりとされる。単色無地の素朴なつくりが特徴、模様の入った「秩父銘仙」の誕生により廃れて製法も途絶えるが、昭和に復興。



古くから養蚕業が盛んな埼玉県秩父市に、かつて人気を博した絹織物がある。繭となる過程で変色や変形した「くず繭」を利用してつくる、秩父太織だ。使い込むほど風合いが増し、低価格であつたことから江戸を中心

に広く知られるようになった。その後、一度は廃れたものの、昭和に入り、復興を果たした。南麻耶さんは、秩父市の地域おこし協力隊として秩父銘仙のプロモーションに参加。その際に、秩父太織と出会い、心奪われたという。

秩父太織の魅力は?

南「糸づくりから全ての工程を手作業で行うことですね。自宅で飼っていたほど蚕が大好き

なのですが、繭から製品になるまで一人の職人

織物の種類や大きさによっては三千本を超える絹糸を操り、緯糸と何度も交差させながら布地を織る。糸、一本一本に全神経を集中する作業が、ときには十日以上も続く。

こうして糸の準備を終えると、織りに入る。

作業はまず糸づくりから始まる。糸の長さはおよそ470kmにもなるのだが、その全てを座縫りという道具を使って手作業で紡ぐ。そして、紡いだ糸を草木で染め、別々の色に染めた経糸と緯糸にのりをつける。これは、撚りのない糸を使用するので、織りの際に毛羽立ちが出ないようにするためだ。

が行うなんて夢のような仕事だと思いました」

南「多くの人に秩父太織の素晴らしさを伝えるのが夢です。以前スウェーデンに留学して北欧織を学んだのですが、秩父太織と融合すれば新しいものが作れるのではないかと考えています。ゆくゆくは海外にも秩父太織の良さを知ってもらいたいです」

幼いころからものづくりに憧れていたといふ若き職人は、ものづくりを生業とした喜びをかみ締めながら、日々工房で秩父太織の新しい道を模索している。明日への扉を開け、また一步、夢に近づく。

※2017年10月取材。掲載内容は取材当時のものです。

Web版

パソコンやタブレットでもご覧になれます。
今回ご紹介した方を含め、他にも多数の若者たちをご紹介しています。

[アットホーム明日への扉](#)

検索



最新号のご案内

好評公開中

明日への扉スペシャル

日本の伝統文化を継承する100人の若者たち

映像ドキュメンタリー
**「明日への扉」を
ぜひご覧ください。**

WebやTVなどで
お楽しみいただけます。

SNS配信

[Facebook](#) <https://www.facebook.com/AthomeTobira>

[Twitter](#) <https://twitter.com/AthomeTobira>

TV番組

ディスカバリー・チャンネル(CS)

冠番組「アットホーム presents 明日への扉」放映中
毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン

ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

